

高等学校の成績およびA大学入学試験の種別と 入学後の学習成果との関連性について (第2報)

—看護学士課程に焦点をあてて—

Study of the relationship among the records from the high school, records of the entrance examination and records during the baccalaureate nursing program of the A college (part 2)

大野和美*

Kazumi OHNO

矢野理香*

Rika YANO

山口敦子**

Atsuko YAMAGUCHI

荒川義人**

Yoshihito ARAKAWA

The purpose of this study was to investigate the relationship among the records from the high school, records of the entrance examination and records during the baccalaureate nursing program about the students who entered the A college.

The subjects were 175 students who entered the school on 2000 and 2001. The records during nursing program for two years were used for data. A leaving a school person was removed.

The result was as follows :

Although correlation of the records between the high school and the entrance examination wasn't seen, the records between nursing program and the entrance examination was seen.

The English records during nursing program of the recommendation entered student were lower in some thought than the student who entered a school in the way of selecting others.

Correlation of the records during nursing program wasn't seen among the individual personal interview and the group personal interview. Poor correlation was seen in the short essay examination and some of the records during nursing program.

As for the subject test records of the entrance examination, correlation with the records during nursing program was seen in some subjects. But, a tendency couldn't be found between those subjects.

Key words : Nursing education
Entrance examination

* 天使大学 看護栄養学部 看護学科

(2002年12月10日受稿、2003年2月5日審査終了受理)

** 天使大学 看護栄養学部 栄養学科

I. はじめに

高齢化の進展、看護サービスの拡充、医療の高度化・専門化、さらに人々の生活の質の向上に対する期待が高まり、看護職者にはいっそう高い資質が求められている。このような時代の変化や社会の要請を背景に、看護学の学士課程が増設され、この10年間で100校にまで急増した¹⁾。しかし一方、高校生の学力低下が指摘され、教育内容も多様化しているため、様々なタイプの学生が大学に進学してくることが予想されている。また、大学入試のあり方については、知識の量だけではなく、大学での学習に対する意欲・熱意や入学後の能力の伸長も見据え、多様な個性や能力を適切に評価する必要性が唱えられている。よって、看護教育においても、入学してくる学生の多様化などに対応し、看護職者となり得る能力と適性を有した学生を確保することは重要な課題である。

社会のニーズに応える看護職者に必要な能力とは、特に対象者の人間性を尊重し、人間関係を作り上げていく能力、対象者のニーズを把握し、解決していくための思考能力、さらにはこれらをもとに実践に応用できる能力などであり、これらの能力を育成していくことが各看護教育機関の使命となっている。そのため、入学試験（以下、入試と略）の段階においても、入学後、看護学の教育目標を達成し得る学生を選抜することが重要であり、かつ必要である。現在、各看護系大学においては、推薦入学試験（以下、推薦入試と略）の充実が図られるとともに、AO入試など多様な入試制度が導入され、面接や小論文試験（以下、小論文と略）なども積極的に取り入れられている。しかし見方を変えると、入試方法は学力試験の科目や内容、面接及び小論文の有無、その他の基準についても多種多様な状況にあり、各大学は入学前に測定すべき能力とその方法について、試行錯誤の中、入試を実施していることが推察される。従って、看護学士課程に入学した学生の入試成績と入学後の成績、さらには卒業後の追跡調査を行い、入試方法を検討することは意義深いと考える。

A大学は短期大学より改組転換し、平成12年度に大学として初の入学者を受け入れた。大学移行後の入試に関しては、短期大学時代の方法を看護職に必要な能力、教育理念・目標、入学後の学生

の状況などから再検討している。現在実施している選抜方法は、小論文、個人及び集団面接によって選抜する推薦入試、学科試験と個人面接によって選抜する一般入学試験（以下、一般入試と略）、センター試験と個人面接で選抜するセンター試験利用入学試験（以下、センター入試と略）、小論文と個人面接によって選抜する社会人入学試験（以下、社会人入試と略）の4種類である。A大学は看護職に必要な能力や適性を評価する上で面接を重視しており、全ての入試で個人面接を実施している。そこで本研究は、A大学に入学した学生の高등학교（以下、高校と略）の成績、入試の種別などを調査し、入学後1年目、2年目を迎えた段階での学習成果との関連を明らかにすることを目的とする。得られた結果に基づき、A大学の入試方法が学生の入学後の学習の成果を適切に予測し得るものであるか否かを検討する。

II. 研究目的

A大学看護学科に入学した学生の高校の成績、入試の種別及び成績を調査し、入学後1年目、2年目を迎えた段階での学習成果との関連性について、以下の視点から明らかにする。

- ①高校の成績と入試における学科試験の成績（以下、入試学科成績と略）及び入学後の成績との相関について
- ②入試の種別によって入学後の成績に有意な差があるか否かについて
- ③入試の成績と入学後の成績との相関について

ここで述べる高校の成績とは、高校の全教科の評定平均値（以下、評定平均と略）のことである。入試の成績とは、学科試験、個人面接、集団面接、小論文の成績のことであり、入学後の成績とは、選択科目を含む外国語科目（英語）、必修科目である専門基礎科目、及び専門科目の成績を指す。

III. 研究方法

1. 研究対象者

平成12年度及び平成13年度のA大学看護学科の入学者の内、退学者を除く175名を対象とした。平成12年度入学生と平成13年度入学生では入学者の選抜方法が異なっている。平成12年度は推薦入試、学科試験と個人面接によって選抜する一般入

試I期（以下、一般I期と略）、小論文と個人面接によって選抜する一般入試II期（以下、一般II期と略）及び社会人入試の4種類であった。平成13年度は推薦入試、一般入試、センター入試、社会人入試の4種類であった。入学者の年度別、入試の種別の内訳は表1に示す通りである。

2. データ収集方法

データ収集にあたり、学生個人の成績評価を取り扱うことから、A大学の倫理委員会に本研究の審査を申請し、倫理委員会の回答を得た。次に、調査対象の科目担当教員及び一般入試問題出題責任者に対して、本研究の主旨を文書で説明し、成績の借用に関する同意を得た。その際、同意書を2部作成し、科目担当教員及び一般入試問題出題責任者と本研究の双方で1部ずつ保管することとした。次に、学長、看護学科長、教務部長、入試委員長の許可を受け、成績の借用について同意の得られた以下の資料①～③を借用し、データとして使用した。

- ①高校の成績：高校から提出された評定平均(1.0～5.0点)を用いた。
- ②入試の成績：学科試験、個人面接、集団面接、小論文の各評点を使用した。学科試験の内容は、表2に示した通りであり、各々100点満点の試験である（但し、センター入試の英語は200点満点を100点に変換）。また、個人面接、集団面接、小論文の評点はそれぞれ1～100点に変換して用いた。
- ③入学後の成績：研究対象者の1・2年次の外国語科目（英語）及び必修の専門基礎科目・専門科目（表3）の成績を用いた。各科目の得点は0～100点とし、成績が点数で表示されていない科目については、A大学の成績評価の基準に基づいて、優を90点、良を72点、可を62点にそれぞれ変換した。また、英語の科目や栄養代謝学I・IIの科目で、他大学や他学科での既修得単位がA大学看護学科入学時に単位認定され

た学生は評点がないため、データから削除した。外国語科目（英語）に選択科目を含めた理由については、A大学の教育目標に“国際的視野を養う”ことが掲げられ、英語教育に力を入れていること、大学入学時に単位が認定された学生以外は全員が選択し履修していることなどから、入試学科成績の英語と入学後の英語の成績をより詳しく分析したい意図による。

3. データ分析方法

高校の成績（評定平均）と入試学科成績及び入学後の成績、入試の各成績（個人面接、小論文、集団面接、学科試験）と入学後の成績との相関を見るために、年度別にピアソンの積率相関係数を求めた。入試の種別による入学後の成績の差を見るために、一元配置分散分析を行い、有意差があると認められた場合、多重比較検定を行った。更に、個人面接、小論文、集団面接の成績を成績上位群と下位群とに分け、2群間で入学後の成績に差があるか否かを見るためにt検定を行った。データ解析は、エクセル統計 Ver.5.0を使用した。

4. 倫理的配慮

本研究は、記録類の取り扱いについて、秘密保持のために以下のような倫理的配慮をした。まず、対象者個人が特定されることを防ぐために、研究者が対象者全員に個人コード番号をつけた。そして、記録類の個人名をコード番号に置き換え、個人名を削除した。このように個人名が特定されないデータとした上で、数量的処理に関しては、学外の研究補助者に依頼した。記録類は、施錠可能な場所で保管した。

IV. 結果

1. 高校の成績（評定平均）と入試学科成績及び入学後の成績との関連について

平成12年度入学生では、高校の評定平均と一般

表1 研究対象者の年度別・入試の種別内訳

	推薦入試	一般入試 I 期	一般入試 II 期	センター試験 利用入試	社会人 入試	合計数
平成12年度 入学生	41	33	9		3	86
平成13年度 入学生	40	42		7	0	89

表2 A 大学入試科目

平成12年度 入学生	入 試 科 目		
推薦入試	個人面接	小論文	集団面接
一般入試 I期	個人面接	学科試験 I (* 1)	学科試験 II (* 2)
一般入試 II期	個人面接	小論文	
社会人入試	個人面接	小論文	

- * 1 「英語 I・英語 II」、「世界史 B」、「日本史 B」、「国語 I・国語 II」より 1 科目選択
- * 2 「数学 I・数学 II」、「化学 I B」、「生物 I B」より 1 科目選択

平成13年度 入学生	入 試 科 目			
推薦入試	個人面接	小論文	集団面接	
一般入試	個人面接	学科試験 I (* 3)	学科試験 II (* 4)	学科試験 III (* 5)
センター試験 利用入試	個人面接	学科試験 I (* 3)	学科試験 II (* 4)	学科試験 III (* 5)
社会人入試	個人面接	小論文		

- * 3 「英語 I・英語 II」
- * 4 「国語 I・国語 II」、「数学 I・数学 A」より 1 科目選択
- * 5 「生物 I B」、「化学 I B」より 1 科目選択

表3 研究対象となった授業科目一覧

	平成12年度入学生	平成13年度入学生
外国語科目 ^ 英語 V	英語 I 英語 II (選択) オーラルイングリッシュ I オーラルイングリッシュ II (選択)	英語 I オーラルイングリッシュ I
専門基礎科目	栄養代謝学 I 栄養代謝学 II 形態機能学 I 形態機能学 II 病態治療学 I 病態治療学 II 看護薬理学 家族社会学 環境生活科学論 医療と倫理 人間関係論 保健医療福祉システム論 I	栄養代謝学 I 形態機能学 I 形態機能学 II 病態治療学 I 生涯発達論 家族社会学
専門科目	看護学原理 看護過程とヘルスアセスメント I 看護ケア提供システム論 基礎看護技術論 I 基礎看護技術論 II 基礎看護技術論 III 健康生活看護学 健康生活看護学 II-1 健康生活看護学 III-1 家族看護学 I 看護治療学 I 基礎看護学臨地実習	看護学原理 看護ケア提供システム論 基礎看護技術論 I

I期の入試学科成績との間に有意な相関は見られなかった。また、平成13年度入学生においても、評定平均と一般入試及びセンター入試の学科成績との間に有意な相関は見られなかった。

次に、高校の成績と入学後の成績との関連については、平成12年度入学生では、評定平均と看護学原理、健康生活看護学、専門科目平均、基礎看護学臨地実習において、弱い相関が見られた(表4)。また、推薦入試による入学生については相関は見られなかったが、一般I期の入学生では、評定平均と英語2科目、英語平均、専門基礎科目の中の6科目、専門基礎科目平均、専門科目の中の4科目、専門科目平均、基礎看護学臨地実習との間に相関が見られた(表13-1)。

平成13年度入学生では、評定平均と栄養代謝学I、形態機能学I及びII、専門基礎科目平均、基礎看護技術論Iにおいて、弱い相関が見られた。その中で、推薦入試による入学生については相関は見られなかったが、一般入試による入学生では、栄養代謝学I、形態機能学II、専門基礎科目平均に弱い相関が見られた(表5)。

2. 入試の種別による入学後の成績の差について

平成12年度入学生では、英語4科目の平均点が、推薦入試による入学生は一般I期及び社会人入試による入学生よりも有意に低かった。専門基礎科目の平均点については、社会人入試による入学生が、推薦、一般I期、一般II期の入学生よりも有意に高かった。また、一般I期の学生は一般II期の学生よりも有意に平均点が高かった。専門科目別に見ると、基礎看護技術論IIIにおいて、一般II期の学生が、推薦、一般I期の学生よりも有意に成績が高かった。他の科目においては、有意な差は見られなかった(表6)。

平成13年度入学生では、英語2科目の平均点において、推薦入試による入学生の成績は一般入試による入学生よりも有意に低かった。専門基礎科目平均、専門科目平均においては、成績に有意な差は見られなかった(表7)。

3. 入試成績と入学後の成績との関連について

1) 個人面接の成績と入学後の成績との関連について

平成12年度入学生では、個人面接の成績と入学後の成績(各科目)に相関は見られなかった(表

4)。しかし、推薦入学者に限定して見ると、個人面接の成績と栄養代謝学I、保健医療福祉システム論I、基礎看護技術論II、健康生活看護学III-1(老年)において、弱い負の相関が見られた(表8)。

次に平成13年度入学生についても、個人面接の成績と入学後の成績(各科目)に相関は見られなかった(表5)。個人面接の成績が60点以下と80点以上の学生の間、英語平均、専門科目の平均点に有意な差は見られなかったが、専門基礎科目平均においては有意な差が見られ、80点以上の学生の方が成績が良かった(表9)。

2) 小論文の成績と入学後の成績との関連について(推薦入試のみ)

平成12年度入学生では、小論文の成績と家族看護学I、専門科目平均において、弱い相関が見られた(表8)。また、小論文の成績が60点以下と80点以上の学生の間では、専門科目の平均点に有意な差が見られ、80点以上の学生の方が成績が高かった(表10)。

平成13年度入学生については、小論文の成績と家族社会学、看護学原理において、弱い相関が見られた(表11)。また、小論文の評点が70点未満と70点以上の学生の間では、全科目平均点に有意な差が見られた(表12)。

3) 集団面接の成績と入学後の成績との関連について

平成12年度入学生では、集団面接の成績とオーラルイングリッシュIとは弱い負の相関、病態治療学Iとは弱い相関が見られた(表8)。

平成13年度入学生については、集団面接の成績と入学後の成績に相関は見られなかった(表11)。

4) 入試学科成績と入学後の成績との関連について

平成12年度入学生の内、学科試験が課されたのは一般I期のみであった。入試学科成績と入学後の成績で関連のあったものは、表13-1~2に示す通りである。学科合計得点と家族社会学で弱い負の相関が、学科試験Iの得点とオーラルイングリッシュIIで相関、及び基礎看護技術論IIIで負の相関が、学科試験IIの得点と基礎看護技術論IIIで弱い相関が見られた。学科試験の科目別に入学後の成績との関連を見ていくと、入試の英語の成績とオーラルイングリッシュIIで相関、基礎看護技術論IIIとは負の相関が、国語と健康生活看護学II-1(地域)で負の相関が、数学と病態治療学II、

表4 高校の成績及び個人面接成績と入学後の成績との相関係数（平成12年度）

科目名	入学生全体の 評定平均	個人面接成績
看護学原理	0.229*	0.039
看護過程とヘルスアセスメントⅠ	0.052	0.127
看護ケア提供システム論	-0.026	0.139
基礎看護技術論Ⅰ	0.124	-0.082
基礎看護技術論Ⅱ	0.206	-0.159
基礎看護技術論Ⅲ	0.018	-0.072
健康生活看護学	0.212*	0.115
健康生活看護学Ⅱ-Ⅰ(地域)	0.186	0.149
健康生活看護学Ⅲ-Ⅰ(老年)	0.064	-0.151
家族看護学Ⅰ	0.196	0.099
看護治療学Ⅰ	0.045	0.027
専門科目平均	0.212*	0.037
基礎看護学臨地実習	0.228*	-0.028

*p<0.05 **p<0.01

表5 高校の成績及び個人面接成績と入学後の成績との相関係数（平成13年度）

科目名	入学生全体の 評定平均	一般入試による 入学生の評定平均	個人面接成績
英語Ⅰ	-0.022*	0.109	-0.018
オーラルイングリッシュⅠ	0.070	0.229	0.065
英語平均	0.044	0.222	0.021
栄養代謝学Ⅰ	0.290**	0.405**	0.021
形態機能学Ⅰ	0.228*	0.166	0.151
形態機能学Ⅱ	0.245*	0.368*	-0.044
病態治療学Ⅰ	0.049	-0.003	0.173
生涯発達論	0.053	-0.053	-0.067
家族社会学	0.048	-0.012	0.182
専門基礎科目平均	0.287**	0.337*	0.109
看護学原理	0.007	0.262	0.003
看護ケア提供システム論	0.042	0.046	0.103
基礎看護技術論Ⅰ	0.259*	0.219	-0.002

*p<0.05 **p<0.01

表6 入試の種別による入学後の成績の差（平成12年度）

	推薦入試 (N=41)	一般Ⅰ期 (N=33)	一般Ⅱ期 (N=9)	社会人入試 (N=3)	F値
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	
英語4科目平均	78.35 (9.41)	82.12 (9.13)	79.06 (9.14)	85.18 (5.33)	5.255
	**				
	*				
専門基礎科目平均	78.36 (9.45)	78.95 (9.62)	76.96 (9.41)	83.48 (8.46)	4.396
	**	**	*	**	
基礎看護技術論Ⅲ	80.10 (9.44)	82.61 (9.47)	90.00 (0.00)	90.00 (0.00)	3.872
	*				
	*				

*p<0.05 **p<0.01

表7 入試の種別による入学後の成績の差 (平成13年度)

	推薦入試 (N=40)	一般入試 (N=42)	センター入試 (N=7)	F 値
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	
英語 2 科目平均	75.34 (10.07)	79.60 (8.42)	80.36 (8.81)	4.873
	**			
専門基礎科目平均	78.69 (9.89)	77.32 (9.52)	79.26 (7.67)	1.598
専門科目平均	81.41 (12.32)	80.37 (11.19)	82.19 (11.01)	0.367

*p<0.05 **p<0.01

表8 推薦入学生の入試成績と入学後の成績との相関係数 (平成12年度)

科目名	個人面接成績	集団面接成績	小論文成績
英語 I	-0.118	-0.244	0.086
英語 II (選択) N=38	-0.033	0.023	0.085
オーラルイングリッシュ I	0.114	-0.346*	0.151
オーラルイングリッシュ II (選択) N=39	0.042	0.105	-0.103
英語平均	0.017	-0.087	0.071
栄養代謝学 I	-0.412**	-0.157	0.045
栄養代謝学 II	-0.195	-0.070	0.249
形態機能学 I	-0.230	-0.120	0.165
形態機能学 II	-0.161	-0.110	0.005
病態治療学 I	-0.052	0.314*	-0.039
病態治療学 II	-0.004	-0.082	0.160
看護薬理学	-0.193	-0.052	0.164
家族社会学	-0.155	0.021	0.057
環境生活科学論	-0.044	-0.152	0.073
医療と倫理	0.140	0.120	0.143
人間関係論	-0.153	0.075	0.023
保健医療福祉システム論 I	-0.423**	-0.041	0.058
専門基礎科目平均	-0.235	-0.051	0.147
看護学原理	-0.037	0.074	0.039
看護過程とヘルスアセスメント I	0.026	0.052	-0.055
看護ケア提供システム論	-0.078	0.111	0.033
基礎看護技術論 I	-0.096	0.051	0.222
基礎看護技術論 II	-0.322*	-0.013	0.144
基礎看護技術論 III	-0.308	0.024	0.185
健康生活看護学	-0.021	0.087	0.237
健康生活看護学 II - 1 (地域)	-0.008	-0.054	0.229
健康生活看護学 III - 1 (老年)	-0.320*	0.101	0.084
家族看護学 I	0.048	-0.136	0.291*
看護治療学 I	-0.202	-0.082	0.096
専門科目平均	-0.206	0.030	0.295*
基礎看護学臨地実習	-0.160	-0.099	0.257

*p<0.05 **p<0.01

表9 個人面接成績上位群・下位群の比較 (平成13年度)

	成績下位群 60点以下 (N=23)		成績上位群 80点以上 (N=37)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
英語 2 科目平均	76.38	9.35	79.04	9.00	-1.520
専門基礎科目平均	77.32	9.99	79.85	8.99	-2.424*
専門科目平均	75.78	10.64	78.24	13.07	-1.127

*p<0.05 **p<0.01

表10 小論文成績上位群・下位群の比較 (平成12年度)

	成績下位群 60点以下 (N=13)		成績上位群 80点以上 (N=11)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
専門科目平均	76.90	11.63	80.08	10.68	-2.316*

*p<0.05 **p<0.01

表11 推薦入学生の入試成績と入学後の成績との相関係数 (平成13年度)

科目名	集団面接成績	小論文成績
英語 I	-0.067	0.302
オーラルイングリッシュ I	0.096	0.190
英語平均	0.047	0.265
栄養代謝学	0.060	0.118
形態機能学 I	0.061	-0.025
形態機能学 II	0.059	0.204
病態治療学 I	0.116	0.155
生涯発達論	-0.271	0.064
家族社会学	-0.150	0.462**
専門基礎科目平均	0.016	0.213
看護学原理	0.109	0.332*
看護ケア提供システム論	0.234	0.072
基礎看護技術論 I	0.085	0.248

*p<0.05 **p<0.01

表12 小論文成績上位群・下位群の比較 (平成13年度)

	成績下位群 70点未満 (N=32)		成績上位群 70点以上 (N=8)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
全科目平均	76.97	10.68	80.86	10.41	-2.971*

*p<0.05 **p<0.01

基礎看護技術論Ⅲで相関が、化学と看護学原理で強い相関が見られ、生物と家族社会学で負の相関が見られた。

平成13年度入学生では、一般入試とセンター入試で学科試験が課されていた。その内、一般入試の学科成績と入学後の成績で関連のあったものは表14-1~2に示す通りであり、学科合計得点と形態機能学 I、家族社会学で弱い相関が、学科試験Ⅲの得点と形態機能学 I で弱い相関が、数学と看護ケア提供システム論に相関が、化学と基礎看護技術論 I に強い相関が見られた。

V. 考察

1. 高校の成績と入試学科成績及び入学後の成績との関連について

高校の評定平均と入試学科成績との間に、平成12年度、平成13年度においても相関は見られなかった。これは、各高校からの評定平均に対して、高

校格差を考慮した補正を実施していないことによるのではないかと考えられる。また、倉元・川又²⁾が「個々の評定の判断が高校の内規に委ねられており、それに対して統一的な基準がない以上、学習成績概評は高校の考え次第でどのようにでもなると言っても過言ではない」と指摘しているように、評定平均そのものが複雑な要素を含んだものであるため、入試学科成績との間に相関は見られなかったと考えられる。

しかし一方で、入学後の成績との間にはいくつかの科目と相関が見られたことにより、評定平均が入学後の成績を予測しうる可能性を否定することはできない。よって、今後も評定平均が入学後のどの成績を予測しうるのか、評定平均をどう取り扱うかについて、慎重に検討されるべきであると考えられる。

2. 入試の種別による入学後の成績の差について 推薦入試によって入学した学生は英語の科目の

表13-1 一般I期入学生の高校の成績及び入試学科成績と入学後の成績との相関係数(1)
(平成12年度)

N=33

科目名	評定平均	学科試験合計	学科試験I	学科試験II
英語I	0.447**	-0.113	-0.103	0.002
英語II(選択) N=33	0.286	-0.047	0.054	-0.128
オーラルイングリッシュI	0.393*	-0.016	0.064	-0.105
オーラルイングリッシュII(選択) N=30	0.200	0.195	0.431*	-0.343
英語平均	0.386*	0.017	0.070	-0.074
栄養代謝学I	0.286	0.130	0.114	0.004
栄養代謝学II	0.282	0.035	0.022	0.014
形態機能学I	0.369*	0.087	-0.071	0.200
形態機能学II	0.293	-0.209	-0.213	0.034
病態治療学I	0.447**	-0.116	-0.134	0.039
病態治療学II	0.212	-0.050	-0.242	0.264
看護薬理学	0.515**	-0.113	-0.094	-0.009
家族社会学	0.371*	-0.355*	-0.187	-0.177
環境生活科学論	0.442**	-0.148	-0.334	0.270
医療と倫理	0.112	-0.284	-0.188	-0.090
人間関係論	-0.030	0.279	0.251	0.000
保健医療福祉システム論I	0.517**	-0.325	-0.358	0.088
専門基礎科目平均	0.517**	-0.136	-0.297	0.234
看護学原理	0.315	-0.308	-0.161	-0.156
看護過程とヘルスアセスメントI	0.058	0.019	-0.161	0.239
看護ケア提供システム論	-0.210	0.030	0.199	-0.231
基礎看護技術論I	0.388*	0.182	-0.037	0.269
基礎看護技術論II	0.434*	-0.166	-0.294	0.193
基礎看護技術論III	0.125	-0.128	-0.441*	0.437*
健康生活看護学	0.117	-0.226	-0.123	-0.107
健康生活看護学II-1(地域)	0.406*	-0.232	-0.301	0.125
健康生活看護学III-1(老年)	0.343	0.109	0.149	-0.068
家族看護学I	0.478**	-0.337	-0.197	-0.142
看護治療学I	0.187	-0.260	-0.272	0.051
専門科目平均	0.439*	-0.204	-0.248	0.087
基礎看護学臨地実習	0.450**	-0.122	-0.079	-0.042

*p<0.05 **p<0.01

平均点が、一般入試及び社会人入試によって入学した学生よりも有意に低い結果が出ており、平成12年度及び平成13年度で同様の結果となった。これは推薦入試に英語の試験が課されておらず、そのため推薦入学者の英語力の個人差が出たためではないかと考えられる。更に、平成12年度の一般I期では入試科目の英語は選択制であったが、平成13年度の一般入試及びセンター入試からは英語が必修となり、一般入試によって入学した学生においてはそれらを反映して英語力のある学生が入学してきていると思われる。よって、英語の成績については、推薦入試によって入学した学生と、特に一般入試によって入学した学生との間に有意な差が見られたと考えられる。今後、推薦入試を経て入学してきた学生に対し、状況に応じて英語に関するフォローアップを検討することが必要となる可能性もある。

次に、専門基礎科目、専門科目の成績においては、推薦入試によって入学した学生と他の選抜方法で入学した学生(社会人を除く)との間に有意差はなかった。推薦入学者は入試において学科試験を課されておらず、学力を見るための試験は行われていないが、専門基礎・専門科目の成績に差がなかったことから、1・2年次までの学習においては、他の選抜方法で入学した学生と学力的な差はないと考えられる。では、推薦入試における学力の測定は何によって可能になっているのだろうか。現に考えられることとしては、推薦入試では評定平均3.8以上が出願の条件となっていること、個人面接等で志望動機が確実に確認されていること、論理的思考力を問う小論文試験が課され、一定の評点に達していること等が挙げられる。今後の成績についても関連を見ていく必要がある。

一方、社会人入試によって入学した学生が、英

表13-2 一般I期入学生の入試学科成績と入学後の成績との相関係数(平成12年度)

科目名	英語 (N=18)	国語 (N=15)	数学 (N=10)	化学 (N=5)	生物 (N=18)
英語 I	-0.152	0.168	-0.215	0.317	-0.121
英語 II (選択)	-0.082	0.348	0.181	0.071	-0.302
オーラルイングリッシュ I	0.224	0.035	-0.128	0.096	-0.215
オーラルイングリッシュ II (選択)	0.535*	0.261	-0.368	0.599	-0.410
英語平均	0.112	0.267	-0.069	0.351	-0.235
栄養代謝学 I	0.164	0.093	0.133	0.630	-0.092
栄養代謝学 II	0.070	0.023	0.058	0.017	-0.032
形態機能学 I	0.029	0.002	0.427	0.522	-0.034
形態機能学 II	-0.216	-0.336	0.129	-0.322	0.029
病態治療学 I	-0.163	-0.044	0.112	-0.586	0.251
病態治療学 II	-0.052	-0.468	0.637*	-0.605	0.092
看護薬理学	0.036	-0.159	0.220	-0.257	-0.170
家族社会学	-0.206	-0.109	0.183	0.439	-0.633**
環境生活科学論	-0.186	-0.299	0.359	-0.597	0.458
医療と倫理	-0.278	0.023	-0.220	0.423	-0.304
人間関係論	0.101	0.305	-0.039	0.369	-0.126
保健医療福祉システム論 I	-0.198	-0.434	0.020	0.079	-0.016
専門基礎科目平均	-0.234	-0.277	0.599	-0.001	0.055
看護学原理	-0.180	-0.203	-0.393	0.917*	-0.230
看護ケア提供システム論	0.149	0.187	-0.489	0.237	-0.279
基礎看護技術論 I	-0.078	-0.044	0.205	0.328	0.159
基礎看護技術論 II	-0.203	-0.318	0.163	0.203	0.137
基礎看護技術論 III	-0.627**	-0.282	0.695*	-0.247	0.462
健康生活看護学	-0.315	0.064	-0.398	0.043	-0.100
健康生活看護学 II-1 (地域)	-0.063	-0.637*	-0.003	-0.029	0.364
健康生活看護学 III-1 (老年)	0.220	0.153	-0.105	0.017	-0.120
家族看護学 I	-0.086	-0.266	-0.229	0.138	-0.053
看護治療学 I	-0.305	-0.262	0.058	-0.205	0.032
専門科目平均	-0.263	-0.242	-0.129	0.129	0.070
基礎看護学臨地実習	-0.068	-0.093	0.143	0.105	-0.117

*p<0.05 **p<0.01

語、専門基礎科目で、推薦入試及び一般I期・II期によって入学した学生よりも成績が高いという結果は、山本³⁾が「社会人の成績は良好であり、社会人入学を積極的に進めるべき」とした調査と同様の結果であった。社会人入試によって入学した学生は動機づけが非常に高く、入学後学業に専念していることから、入学後の成績が良好な結果となっていると考えられる。また、社会人としての経験や教養などから、自ら学ぶことや知識を踏まえて自ら思考するトレーニングがなされていることなども、他の学生より成績が高い一因なのではないかと考えられる。しかしながら、平成12年度の社会人入試によって入学した学生は3名のみであり、他の選抜方法により入学した学生との比較には限界がある。よって、今後データを積み重ねて比較検討していく必要がある。

3. 入試の成績と入学後の成績との関連について

1) 個人面接及び集団面接の成績と入学後の成績との関連について

個人面接の成績と入学後の成績との関連については、平成12年度、平成13年度入学生ともに相関は見られず、平成12年度の推薦入試によって入学した学生に限定して見ると、弱い負の相関を示す科目が見られた。また、平成12年度の個人面接の成績上位群と下位群との間に有意な差は見られなかったが、平成13年度の上位群と下位群とでは専門基礎科目についてのみ有意な差が見られた。一方、推薦入試のみで実施している集団面接の成績と入学後の成績との関連については、明らかな相関や、集団面接の成績上位群と下位群との間に有意な差は見られなかった。

面接試験の目的は、佐藤⁴⁾が述べているように、「受験生を直接、観察し、質問を通して性格や適性、コミュニケーション能力(聞く能力、論理的に話す能力、説得力)などの情報を収集する

表14-1 一般入試による入学生の学科成績と入学後の成績との相関係数(1) (平成13年度)

N=42

科目名	学科試験合計	学科試験 I	学科試験 II	学科試験 III
英語 I	0.200	0.299	-0.116	0.056
オーラルイングリッシュ I	-0.051	0.077	-0.225	0.068
英語平均	0.001	0.182	-0.207	0.026
栄養代謝学 I	-0.255	-0.107	-0.230	0.011
形態機能学 I	0.320*	0.009	-0.092	0.381*
形態機能学 II	-0.203	-0.033	-0.089	-0.105
病態治療学 I	0.220	-0.091	0.013	0.276
生涯発達論	0.182	0.076	0.279	-0.097
家族社会学	0.356*	0.282	0.269	-0.074
専門基礎科目平均	0.081	-0.008	-0.078	0.148
看護学原理	0.080	0.072	0.203	-0.135
看護ケア提供システム論	0.103	-0.092	0.304	-0.067
基礎看護技術論 I	0.221	0.120	0.027	0.106

*p<0.05 **p<0.01

表14-2 一般入試による入学生の学科成績と入学後の成績との相関係数(2) (平成13年度)

科目名	国語 (N=18)	数学 (N=24)	化学 (N=8)	生物 (N=34)
英語 I	-0.463	0.001	0.725	-0.084
オーラルイングリッシュ I	-0.295	-0.178	0.663	-0.015
英語平均	-0.350	-0.123	0.673	-0.067
栄養代謝学 I	-0.038	-0.375	0.003	0.147
形態機能学 I	-0.327	0.022	0.562	0.297
形態機能学 II	0.321	-0.384	-0.238	0.029
病態治療学 I	0.086	0.039	0.181	0.305
生涯発達論	0.314	0.275	-0.238	-0.091
家族社会学	0.052	0.292	0.362	-0.061
専門基礎科目平均	0.000	-0.141	0.248	0.212
看護学原理	0.257	0.158	0.182	-0.194
看護ケア提供システム論	0.110	0.437*	0.422	-0.172
基礎看護技術論 I	0.121	0.012	0.828*	0.0262

*p<0.05 **p<0.01

こと」である。そして、面接試験の信頼性の評価のためには、入学後の学生の追跡調査が必要であると付け加えている。このことを基に推測すると、面接で評価する能力、例えばコミュニケーション能力（聞く能力、論理的に話す能力、説得力）は、今回関連を見た科目の修得に必要とされた能力であっただろうかという疑問が生じる。つまり、これまでの専門基礎及び専門科目の内容は、専門知識の獲得が主であるために、面接で評価している能力は成績には余り反映されず、面接の成績と入学後の成績との間に相関が見られなかったのではないかと考えられる。面接試験は、コミュニケーション能力の評価が大きいので、今後他者と関わる実習等の成績を見る必要がある。そこで、平成12年度入学生については基礎看護学臨地実習との関連を見たが、相関はなかった。これは、基礎看

護学臨地実習が学生にとっては初めての実習科目であり、成績にばらつきが出にくく、実際に学生全体の8割がAランク（優）の成績であったことが要因と考えられる。よって、今後の実習科目の成績を更に追跡していく必要がある。

2) 小論文の成績と入学後の成績との関連について

平成12年度、平成13年度の入学生ともに、小論文の成績と入学後の各科目、各科目群の平均値との間にはいくつかの科目で弱い正の相関が見られたのみだったが、成績上位群と下位群との間に有意な差が見られた。坂川⁵⁾は、「小論文で評価されるのは、論理的思考力や一般的な知識力を中心にした、総合的な学力」であると述べており、近藤ら⁶⁾もいわゆる学力試験のみでは測定しきれない学生の情意領域や問題解決能力を見る方法として小論文を挙げている。しかし今回、小論文の

成績上位群と下位群との間で、1・2年次までの入学後の成績に有意な差が見られたことから、小論文試験が専門知識を獲得することのできる基礎的学力を判断する上でも有効であることが示唆された。今後は、小論文試験により測定が可能とされる論理的思考力や問題解決能力を要する実習科目の成績との関連を追跡調査していく必要がある。

3) 入試学科成績と入学後の成績との関連について

入試学科成績と入学後の成績との間に正の相関が見られたものもあったが、相関のあった学科試験の科目と入学後の成績に説明できるだけの関連性や傾向は見出せなかった。

以上、1～3の考察をまとめると、高校の評定平均の取り扱いについては、入学後の成績を予測しうる可能性を含めて慎重に検討していくこと、推薦入学者の英語の成績が他の選抜方法で入学した学生よりも有意に低かったことから、今後何らかのフォローアップの必要性が課題として示唆された。また、入試の各成績と入学後の成績との関連については、明らかなものは見出されなかった。これは、面接や小論文試験によって評価した人間性やコミュニケーション能力等が1・2年次までの成績には反映されにくいことが要因の1つと考えられる。また、人間性やコミュニケーション能力等は、4年間の大学生活の中で成長を遂げていくものであることを考えると、1・2年次の段階で評価を行うには学習の進行状況からいっても時期が早く、今後、3・4年次の実習科目等の成績で入試の妥当性を評価していく必要があると考える。

VI. 結論

本研究の結果、以下のことが明らかになった。

- ①高校の成績（評定平均）と入試学科成績に相関は見られなかったが、入学後のいくつかの成績に相関が見られた。
- ②推薦入学者は入学後の英語の成績が、他の選抜方法で入学した学生よりも有意に低く、社会人入学の学生は、英語、専門基礎科目の成績が、他の選抜方法で入学した学生よりも有意に高かった。
- ③入試の成績と入学後の成績との関連では、個人及び集団面接については入学後の成績と相関は

見られず、小論文の成績は入学後のいくつかの科目の成績と弱い相関があり、入試学科成績は入学後の成績と相関は見られたものの、相関の見られた科目の内容に傾向を見出すことはできなかった。

VII. おわりに

今回の研究結果は、あくまでも学習途上にある学生の学習成果に焦点をあてたものである。よって、今後も継続して追跡調査を行い、卒業時、卒業後の成果を見ていくことが重要と考える。また、入学後の成績に関して、各科目の成績評価には出席状況や態度面に関する平常点を加えられていることも多く、その科目に関する学生個人の能力が実質の評点として表われていない可能性がある。よって、そのような成績評価をデータとして使用していることによる限界も否定できない。

最後に、今後さらに社会における活動が期待される看護職者を教育、養成するにあたり、学習の成功を予測しうる選抜方法を入試制度に導入し、優秀で成長著しい学生を選び、教育することは非常に重要と言える。本研究の遂行にあたっては、倫理面での難しさ等を痛感したが、今後も継続した取り組みが必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 国公立看護系大学一覧（平成14年度）、21世紀の看護学教育、財団法人大学基準協会資料第56号、83-85、2002。
- 2) 倉元直樹・川又政征：高校調査書の研究－「学習成績概評A」の意味、国立大学入学者選抜研究連絡協議会－第22回大会研究発表予稿集、73-78、2001。
- 3) 山本昇：看護教育機関における入学者選抜方式の検討－入学試験と入学後の成績との関連性、日本看護学教育学会誌、8(1)、17-27、1998。
- 4) 佐藤博：学力以外の能力、資質、意欲等をどのように評価するか－「面接試験」を考える、国立大学入学者選抜研究連絡協議会－第22回大会研究発表予稿集、36-41、2001。
- 5) 坂川雅子：小論文を入試科目に加える意味、看護教育、39(2)、96-104、1998。
- 6) 近藤潤子他：座談会－看護婦国家試験の現状と改善への展望、看護教育、20(6)、335-348、1979。

- 7) 小山真理子他：看護学士課程における入学者選抜方式の検討，聖路加看護大学紀要，No.20，11-21，1993.
- 8) 坪井良子：看護学校の入学試験について，看護教育，21 (3)，138-144，1980.
- 9) 横山美樹他：聖路加看護大学入学生の看護ならびに本学の選択動機，聖路加看護大学紀要，No.22，72-79，1996.
- 10) 平成13年度看護学教育ワークショップ「看護系大学における教育の充実に向けて」報告書，2001.